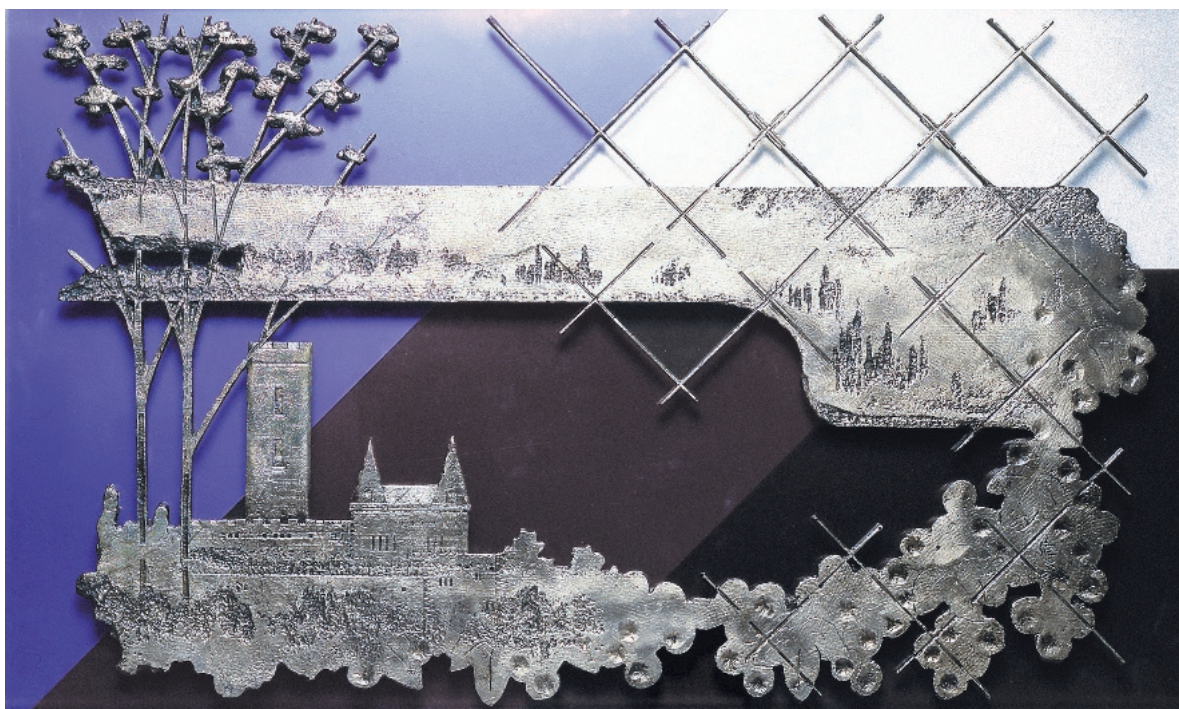


石川県立美術館だより

第515号 令和8年9月1日発行

BIJUTSUKAN
DAYORI

蓮田修吾郎 ー世界を拓く窓



蓮田修吾郎《白銅浮彫「豊穡なるライン」》1983年
ー「蓮田修吾郎 ー世界を拓く窓」よりー

■ 加賀藩の美術工芸【前田育徳会尊經閣文庫分館】

■ 琳派Ⅱ ー相説と草花図の広がりー【古美術】

■ 県美工芸の新しい仲間たち ー新収蔵品展ー【近現代工芸】

■ 優品選【近現代絵画・彫刻】

- 9月の行事予定
- 展覧会記録 輪島塗 ー漆文化を後世にー 何度来館されましたか？展覧会関連行事
- ミュージアムレポート 夏のワークシート集
- 学芸室こぼれ話
- アラカルト ただいま展示中

企画展(第7～9展示室)

蓮田修吾郎 ー世界を拓く窓

主催/石川県立美術館 特別協力/北國新聞社

後援/NHK金沢放送局、MRO北陸放送、テレビ金沢、HAB北陸朝日放送、石川テレビ放送

9月20日(日)～10月25日(日) 会期中無休

金沢市出身の蓮田修吾郎(1915～2010)は、金属工芸・彫刻・建築の分野を横断する独自の作風を確立した作家です。石川県立工業学校(現・石川県立工業高等学校)卒業後、東京美術学校(現・東京藝術大学)で鑄金を学びつつ、彫刻やデザインなどにも目を向けながら作品制作をおこないました。

卒業後は、日展や日本現代工芸美術展、グループ展などを舞台に作品を発表していきます。浮彫やスクリーン形態の作品で評価され、方壺シリーズで立体構成を試み、自身の表現を追求しました。また、ドイツを訪ねし造型作品が環境に調和していることに衝撃を受けてからは「建築と接点を持った金属造型」がテーマに加わりました。美術・工芸が社会の中で果たす役割についての思考を反映したミニチュメントをさかんに制作しながら、自身が主宰した日本金属造型研究所を基盤に、日独の国際交流を促進する活動を精力的におこないました。広い視野をもち、金工の概念を飛び出すように確立させた「金属造型」は、蓮田が拓いた独自の世界といえるでしょう。

本展は、蓮田修吾郎の軌跡を、その代表作はもちろん、貴重な初期作品やデザインの仕事、関連資料などと併せて紹介するものです。蓮田のひと活動を深く掘り下げる、これまでにない機会となるでしょう。ぜひご来館いただき、「金属造型」の世界を味わっていただければ幸いです。

【観覧料】

一般 1,000円(800円)

大学生 800円(600円)

※高校生以下無料

※(内)は20名以上の団体、及び65歳以上の料金

※2階コレクション展観覧料を含む

※身体障がい者・精神障がい者・保健福祉・療育手帳をお持ちの方、またはミライロIDをご提示の方、および付き添いの方1名は観覧無料

【関連行事】

・まちに出よう!作品めぐりバスツアー

①10月17日(土) 13時～15時 30分

②10月18日(日) 13時～15時 30分

*各回内容は同じです

集合・解散:石川県立美術館

定員:各回10名

申込:事前申込制(応募者多数の場合は抽選)

<https://e-ve.event-form.jp/event/139886/8gVccYkLod0>

*受付:9月5日(土)9時より

*参加無料

*土曜講座

①「蓮田修吾郎ー世界を拓く窓」

10月3日(土) 13時30分～15時

講師:竹内唯(石川県立美術館学芸員)

②「かたちをつくるー蓮田修吾郎と大樋年朗」

10月10日(土) 13時30分～15時

講師:奈良竜一(石川県立美術館学芸員)

いずれも 会場:当館講義室

*参加無料、申込不要

・ギャラリートーク

9月21日(月・祝)、

10月12日(月・祝) 14時～15時

会場:当館企画展示室

*要観覧券、申込不要

・対話で!作品鑑賞会

10月11日(日) 11時～11時30分

会場:当館企画展示室

*要観覧券、申込不要

・0才からのファミリー鑑賞会

9月26日(土) ①15時～16時

9月27日(日) ②10時～11時

③13時～14時

講師:富田めぐみ氏(NPO法人赤ちゃんからのアートフレンド

シッブ協会代表理事)

*詳細は当館公式ウェブサイトにて

・コラボスィーツ

会期中、館内カフェ「ルミューゼドウアッシュ KANAZAWA」にて、展覧会をイメージしたコラボスィーツを提供いたします。



《鑄銅「花挿」》
1957年 大樋美術館蔵



《鑄銅浮彫「黒豹スクリーン」》
1953年 個人蔵

いずれも蓮田修吾郎 作、濱崎敏彦 撮影



申込フォーム

加賀藩の美術工芸

9月19日(土)～10月25日(日) 会期中無休

この春、東京国立博物館で開催された『百万石！加賀前田家』をご覧になられた方も多いと思います。本館にて毎年展示をおこなっている作品も多く出品されましたが、広い会場で一堂に並ぶと、改めてその迫力に圧倒されるとともに、百年間守り継がれていたという歴史の重みを痛感する内容でした。

毎年恒例の「加賀藩の美術工芸」の特集展示をおこないます。今日、金沢が美術工芸が盛んな土地となったのは、前田家の歴代藩主が、美術工芸に深い理解と関心を示していたことに他なりません。特に三代藩主利常はそうであったようで、京都から工芸職人を招いて城内の細工所の充実をはかったほか、利常自身も遠州に茶を学び、晩年は仙叟を小松に招いています。本阿弥光悦との交流も見逃せず、刀剣だけでなく、能や書にまで影響が及びました。俵屋宗達の弟子であった宗雪を、加賀へ招いたのも、利常です。



《黒塗引出絵替絵具筆筒》

今回展示する作品の中では、名物裂が利常時代に収集されたものです。家臣を商人に変装させて、長崎の出島で大量に買い求めたエピソードはよく知られています。また蒔絵師の二代五十嵐道甫は、利常と五代綱紀にお目見えしたとの記録があります。

本特集では、前田家に伝わる美術工芸作品のなかから、絵画・漆工・染織・陶磁器など18点を紹介します。

学芸員の眼

蓮田修吾郎は、幅広い視点で物事を見、考え続け、実際の活動へ活かしていった有言実行の作家です。金属工芸(鑄金)の学習から出発しつつも、日本全国に設置された大型モニュメントからちいさなもののデザインに至るまで、「工芸」のイメージのみにとどまらない様々な仕事を、次々と成功させていった生涯でした。

「(作品を)見る人をだましてはならない」という発言、「人々の心の中に生き、愛される」作品を目指す姿勢などから、常に「わたしたち」に眼を向けていたことが分かります。「優しい大衆性」とも評されたその活動が伝わるようにと準備しておりますので、ぜひ皆様の眼で、蓮田の人と作品をご堪能いただければ幸いです。



《HaMaDe》
1990年(石川県金沢市・西部緑地公園)

近現代工芸(第5展示室)

県美工芸の新しい仲間たち —新収蔵品展—

9月19日(土)～10月25日(日) 会期中無休

今回の展示は、令和の時代に入り新たに当館に収蔵された工芸作品を中心に紹介しています。展示作品の一部をみていきましょう。

人形分野からは紺谷力と高田和司の作品が新たに仲間入り。紺谷の《塑造彩色「後宮の勅姫兵」》は、中国・春秋時代に活躍した思想家・孫子が、宮中の美女たちを使って兵士の訓練を行ってみせたエピソード「孫子勅姫兵(孫子、姫兵を勅する)」「(『史記』孫子呉起列伝)の場面から着想を得たものです。高田の《木芯桐塑和紙貼「蒼天」》は、鷹匠の姿を細部まで造形化し、天高く飛び舞う鷹や、青空や空気感までも想起させる作品となっています。鷹匠の帯に挟んでいる餌奮などの道具も作品の見どころとなっています。

また、令和6年度の特別展「食を彩る工芸」開催の

古美術(第2展示室)

琳派Ⅱ

—相説と草花図の広がり—

9月19日(土)～10月25日(日) 会期中無休

前期の「琳派Ⅰ」では、琳派の始祖と仰がれる本阿弥光悦と俵屋宗達、そして俵屋工房を継承し、加賀でも活躍した俵屋宗雪の作品を紹介しました。後期はすべての作品を入れ替えて、宗雪の次世代をになった喜多川相説や、定型化して広まっていった伊年印草花図、さらには19世紀以降の琳派に連なる作品をご紹介します。

宗雪の草花図が、はつきりとした彩色や力強い筆づかいで生命感あふれる表現であるのに対して、その後を継いだ相説は、「一枚の葉、一輪の花をもいとほしむ気持を筆先によく反映せしめてゐる」と評されるように、微妙な色彩と繊細なタッチが特徴です。写実的な草花の描写と、墨のにじみを活かした面的な水墨表現が溶け合った独特の草花図は、以降の絵

師たちに少なからぬ影響を与えたものと思われます。今回は、相説の代表作である石川県指定文化財《秋草図屏風》6曲1双や初期の作品と位置付けられる《草花図屏風》8曲1隻をご紹介します。また北陸ゆかりではありませんが、江戸琳派の手になると思われる《夏秋草図》や、たらし込みを自在に操り、近代にも通ずるデザイン感覚をみせる大坂の絵師、中村芳中(？1819)の描いた「草花図短冊」を公開し、多様な琳派の広がりをご紹介します。

ために制作していただいた作品も収蔵しています。見附正康《赤絵細描小紋大皿》はその1つで、赤絵具を用いて細かな文様を描き込む「赤絵細描」の技法で、伝統的な文様や独自のパターンを組み合わせて器面を完成させます。本作は、余白を効果的に使いながら渦を巻くような構図になっています。

最後に、同時開催中の特別展「蓮田修吾郎―世界を拓く窓」に関連して、蓮田と縁の深い作家も紹介しています。特別展とあわせてこちらもお楽しみください。



見附正康《赤絵細描小紋小皿》



見附正康《赤絵細描小紋大皿》



石川県指定文化財《秋草図屏風》右隻 喜多川相説

9月の行事予定

■対話で！作品鑑賞会

毎月第2日曜日、作品についておしゃべりしながらコレクション展示室を楽しめる日「のびのび鑑賞デー」の恒例開催です。学芸員のサポートのもと、参加者同士で対話しながら作品鑑賞を行います。一人で鑑賞する時とは違った鑑賞の楽しさを味わっていませんか。

9月13日(日) 11時～11時30分

* 申込不要

集合場所：2階 コレクション展示室前

定員：10名程度(先着)

料金：要コレクション展観覧料

* 友の会会員のみなさまは、会員証のご提示で無料

■土曜講座

9月5日(土) 13時30分～15時

「東洋の美に出会う 外国へ渡った工芸品編」

学芸主任 野口明日香

会場：講義室

* 聴講無料、申込不要

■尊経閣文庫分館 講座&ギャラリートーク

加賀藩前田家が築いた知の宝庫「尊経閣文庫」をご紹介します講座とギャラリートーク。

【講座】

9月12日(土) 13時30分～14時30分

「加賀前田家の茶の湯」

講師：福島修氏(東京国立博物館 研究員)

会場：講義室 定員40名(先着)

* 参加無料、要WEB申込

【ギャラリートーク】

9月19日(土) 13時30分～14時

* 申込不要

会場：2階前田育徳会尊経閣文庫分館 展示室

料金：要コレクション展観覧料

講師：当館学芸員

* お問い合わせ：石川県文化振興課

(電話) 076-225-1371

(平日のみ9～17時)



詳細・講座申込フォーム

近現代絵画・彫刻(第3・4・6展示室)

優品選

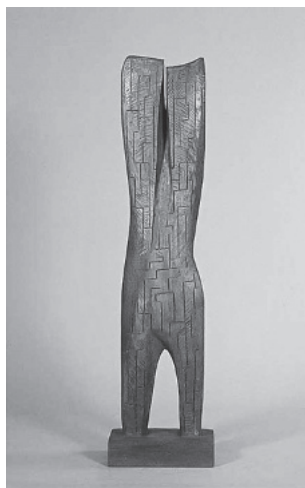
9月19日(土)～10月25日(日) 会期中無休

日本画分野から今尾景年《古樹木兎図》^{みみずく}を紹介しましょう。ミミズクは、フクロウの仲間、モチーフ的にはほぼ同義です。中国では古代の「神聖な鳥」から、次第に闇や冥界と関連付けて「悪鳥」になってしまいました。しかし日本では特に近世以降「福来郎」「不苦勞」などの字を当て、吉祥性を強め、床の間を飾る存在にもなりました。

油彩画分野から、日本海の秋ならではの風景を描いた村田省蔵《秋光》^{あき}を展示します。晩年の稲架木シリーズの一作です。畔に植わった稲架木に横木を渡し、刈り取った稲束を乾燥のため干している場面で、秋の陽光に照らされた稲穂の明暗とおおらかな筆さばきの表現が、黄金色の実りの量感を伝えています。版画分野からは碓伊之助のリトグラフを紹介し、碓の版画制作は最初のフランス留学時代に浮

世絵版画の魅力を再発見したことにはじまります。その後も版画への想いは持ち続け、今回は昭和10年(1935)に二科展に出品された単色ながら、確かなデッサン力に裏付けられた大型のリトグラフ8点の中から展示します。

彫刻分野からは田中太郎《会話》をご紹介します。自身から湧き上がる心の動きを契機に原木の太さ、木目の具合などから作品の輪郭が浮かび上がり、イメージに沿って彫り進んでいくという作者。本作の形が異なるものが交わるような造形と表面に施された幾何学的な線刻もまた作者が制作に際しイメージした形なのでしょう。



田中太郎《会話》

輪島塗 ―漆文化を後世に― 何度来館されましたか？展覧会関連行事

6月27日(土)～8月2日(日)

輪島塗復興プロジェクト関連特別展「輪島塗―漆文化を後世に―」では、皆様に何度もご来館いただけるよう、様々な切り口で興味を持っていただけるようにと、関連行事が目白押しでした。

○ギャラリートーク(日曜4回)13時30分より開催。

輪島塗の歴史を振り返りながら、輪島塗が本地から加職に至るまで素晴らしい技をつないでつづられていることを、展示室で、先生の視点でお話いただきました。

6月28日 浦出勝彦氏(日本工芸会正会員、輪島塗技術保存会会長)

7月5日 西勝廣氏(重要無形文化財「沈金」保持者)

19日 山岸一男氏(重要無形文化財「沈金」保持者、輪島塗資料館館長)

26日 小森邦衛氏(重要無形文化財「髹漆」保持者、石川県立輪島漆芸技術研修所所長)
作品を前にして先生方のお話が聞けるまたとない機会となり、たくさんの方にお集まりいただきました。

○トークショー(土曜2回)13時30分から15時開催。

輪島塗の技を後世につないでいくために現在・未来についてお話いただきました。



6月27日 話し手…浦出勝彦氏、惣田登士樹氏、西端良雄氏、中室惣一郎氏

8月1日 話し手…小森邦衛氏、田中義光氏、水谷内修氏、水口咲氏
能登半島地震や奥能登豪雨の打撃が後継者不足に追い打ちをかけている状況のなか、「こんなに手仕事が残っていることはあり得ない。大切にしていきたい」「精度を保ちながら次に残していくことが大切だ」と思っている「など、力強い意見を交わしました。

○ワークショップ「親子で沈金に挑戦！」7月20日(月・祝)13時より10組20名の親子が参加。思い思いのデザインでオリジナル箸をつくりました。

○土曜講座「スライドトーク」7月11日(土)13時より 寺川和子学芸第二課長

この他、コラボスイーツ「サヴォアフェール」(「伝統的な匠の技」の意)販売など、数多くのイベントがおこなわれました。

展覧会はもちろんですが、今後もぜひ関連行事にもご注目ください。



ミュージアムレポート

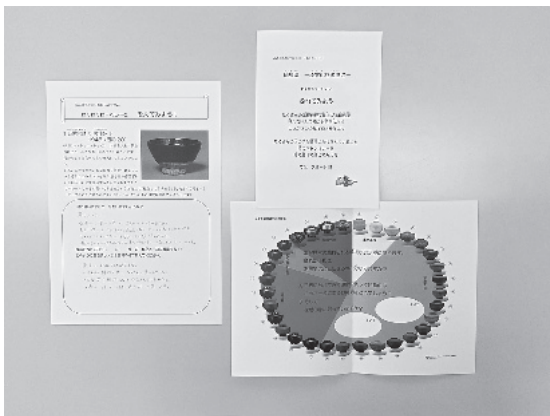
夏のワークシート集

この夏、特別展では「輪島塗―漆文化を後世に―」コレクション展示では「みんなでたのしむびじゅつかん」両展覧会で、来館された皆様に展示をより深く理解し、鑑賞を楽しんでいただくためのツールとして、ワークシートを準備しました。

特別展は輪島塗がなぜすごいのか、潜んでいる工程見本について、近展覧会に触れられる手板での見本が工程見本と一緒に展示されているので、そこから考えるものとなりました。こちらは皆さんの考えや思いが館に戻ってくるものではないので、使用してどうだったかはわからないのですが、館内アンケートに、「子ども用のものかと思ったらどなたでもということ、とても分かりやすかった」や、「案内の後、鑑賞のところが良かった」と感想を頂きました。

コレクション展「みんなでたのしむびじゅつかん」は「何をいれる？何をのせる？」の副題があるように、〇〇箱や〇〇卓のように、作品タイトルにみられる使用目的のかんたんな説明と、このように使うように考えられてはありますが、あなたならどう使うか、何をいれる？のせる？また、何と一緒に展示する？などの問いかけをし、展示室を一周後出口に自分の考えを投稿する場所を設け、いただいた考えを皆さんとシェアできるように、ファイリングしてあります。まさしく大人から子供まで、みんな鑑賞を楽しんで、考えてみた意見・思いが綴られています。

今後展示を鑑賞する際、ワークシートや、ガイドを手にとってみてはいかがでしょうか。



学芸室こぼれ話

西 ゆう子(学芸主幹兼普及課長)

「この時期の大好き」

お題は最近見つけた小さな美となっていますが、私からは「この時期大好きな風景」です。日々田んぼの中を通って通勤しているのですが、青々とした稲の葉の中につんと立っている白鷺の姿を見るのが大好きです。そよぐ風に柔らかく波打つ緑のなかに白い頭が見えると、交通の妨げにならないようなところでしたら、いついつ止まって見てしまいます。白鷺が田んぼの中に長い首をまっすぐ美しく「つくつく」と立っているの、子どもたちが小さなときは「つく」と勝手に呼び名をつけて「たんぼのなかにつくがいるよ、ちゃあちゃん」と親子で出会うのを楽しみにしていました。今年は朱鷺も放鳥されたので、「もしかして赤い頭はいないかな」などと思いつつ、稲穂となった今もこの風景を楽しんでいます。



村上 尚子(学芸第一課学芸専門員)

「今年はどうなるやら」

「小さな美」とは、ずいぶんムズカシイテーマだなあ、と思って困っています。物理的な小ささから「美しい」と感じるのは、内視鏡で自分の体の内部をカメラで見るときでしょうか。臓器が持つひだや凹凸にはひとつひとつ役割があり、機能を果たしている。しかもそれは人工的ではなく、ヒトが母の胎内で、細胞分裂しながら、育ち、生まれ、成長する過程でつくられるとは、ただただ不思議です。そして、こんな小さな世界を、色彩豊かにみられる現代の医療機器の技術のすごさ。「昔はこんな見れなかったでしょ」と、父に見せて医師としての感想が聞きたいと、毎年人間ドックのたびに思っています。無事に終わりますように。

《九谷赤絵蓋物「風薫る」》くたにあかえふたもの かぜかおる

径25.0 高15.5(cm)

平成29年(2017) 第64回日本伝統工芸展

福島武山 ふくしまぶざん

昭和19(1944)～



福島武山の代名詞である赤絵細描^{あかえさいびよう}は、ベンガラを溶いた赤い顔料を用い、髪の毛ほどの極細の線で文様を描く、九谷焼を代表する技法の一つです。その源流は中国・明時代の赤絵金欄手^{せきえきらんて}にあり、日本では江戸時代後期に大成しました。明治時代には万国博覧会への出品を契機に高い評価を受け、一大ブームを巻き起こしました。福島は、この伝統的な赤絵細描に改めて光を当て、現代的な感覚を取り入れた作品を制作しています。



本作では、赤絵細描によるイチヨウ形の網目文様を連続させることで、風車が回転するような躍動感のある意匠を生み出しています。さらに、その上に四角形や風車の文様を白抜きで配し、中心から文様が渦を巻きながら広がるような構成とすることで、風が吹き抜けるような動きを表現しています。また、赤絵細描を基調としながら、一部に色絵や金彩を効果的に施すことで、赤絵の繊細さを一層際立たせています。金彩には福島が自身で調整した金を用いており、赤絵と美しく調和した上品な輝きを放っています。

福島武山は金沢市生まれ。石川県立工業高等学校卒業後、独学で九谷焼の赤絵細描を習得。昭和56年(1981)に日本伝統工芸展へ初入選し、以来、日本工芸会を中心に活動を続けています。平成11年(1999)、第23回全国伝統的工芸品公募展で第一席グランプリ・内閣総理大臣賞を受賞。平成28年(2016)石川県文化功労者、令和2年(2020)能美市文化功労者、令和3年(2021)春の叙勲で瑞宝単光章を受章。現在は九谷焼技術保存会会員。

次回の展覧会

令和8年9月19日(土)
～10月25日(日)

前田育徳会
尊経閣文庫分館

加賀藩の美術工芸

第2展示室

琳派Ⅱ
ー相説と草花図の広がりー

第3・4・6展示室

優品選
【近現代絵画・彫刻】

第5展示室

県美工芸の
新しい仲間たち
ー新収蔵品展ー

企画展示室

蓮田修吾郎
ー世界を拓く窓
9月20日(日)～10月25日(日)

ご利用案内

コレクション展観覧料

一般 370円(290円)

大学生 290円(230円)

高校生以下 無料

※()内は団体料金

9月7日は第1月曜日より

コレクション展観覧無料の日

開館時間

午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間

午前10:00～午後6:00

9月の休館日は
14日(月)～18日(金)

石川県立美術館だより
第515号(毎月発行)

2026年9月1日発行

〒920-0963

金沢市出羽町2番1号

Tel: 076(231)7580

Fax: 076(224)9550

URL <https://www.ishibi.pref.shikawa.jp/>

石川県立美術館は電源立地地域対策交付金を活用して運営しています。

和歌山県の紀州南高梅干しの種を抜き、丁寧にめらめらに練り上げた「梅見月(うめみづき)」のねり梅。梅本来の芳醇な香りと、爽やかな酸味が食欲をそそります。

種なしお手軽!! 紀州南高ねり梅。

4袋以上ご購入で **送料無料** (税込)

1袋 150g **650円** (税込) 送料500円 [1～3袋の場合]

お持ち帰り、お弁当・お料理に。サツとひと搾り!!

●商品お届けまでに1週間～10日程度かかります。ご依頼様以外のご住所へは発送できません。●お支払いの際は商品が届いてからでOKです。(郵便コンビニ兼用振込用紙が入ります)但し、7袋以上のお買い上げの場合は代金引換とさせていただきます。(代引き手数料当社負担)。

●商品にはカタログ、価格表等が同封されます。●のし包装は承れません。●食品につきお客様都合による返品はお受けできません。●お預かりした個人情報等は商品の発送サービスのご案内のみに使用致します。

お申し込みはお電話で 受付時間8:00～17:30 [土(不定休)・日・祝休み]

050-1883-2308

マルヤマ食品株式会社 会社TEL: 03-3953-0040
〒645-0027和歌山県日高郡みなべ町西本庄1282